#### 法政大学 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 同窓会会報

# 第16号

2015年3月1日

発行所: 法政大学デザイン工学部 都市環境デザイン工学科 同窓会

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-33 TEL · FAX (03) 5228 1406

明 発行人 山 口 編集人 会報編集委員会

# 会長メッセージ

#### 都市環境デザイン工学科同窓会(法土会)会長 阴 ШП

平成26(2014)年4月より都市環境デザイン工学科同窓会(法土会)の らせが、単なる会費納入、寄付 会長を仰せつかりました1975年卒業の山口です。同窓会理事、監事の役 金要請ばかりであれば、直ちに **員の方々並びに卒業生皆様方そして教室の先生方とともに、より良い同 ゴミ箱に捨てられてしまいま** 窓会としていくため、会長の任期3年間、以下の目標を持って様々な活 す。同窓会活動の原点を社会情 動に取り組んでいきたいと考えておりますので、どうぞ宜しくお願いい 勢に沿って再構築していくよう たします。

第1は「会員数の増強と会員間の連携の強化」です。毎年80名前後の 新卒業生が誕生しますが同窓会に登録・入会していただける方は限られ 木」という言葉の語源となった ています。また、卒業した後、住所変更などについて連絡していただい ている方は極少数です。同窓会活動に魅力を見出せないことも挙げられ う紀元前2世紀頃の本にある ますが、卒業生同士の間で情報交換、連携を図る手段に乏しいこともそ 「築土構木」にあることは、我々 の原因の一つかもしれません。そのため同窓会が会員間の情報連絡の 土木に携わる者には周知のこと キーステーションの役割を果たしていくことにより、連携を深めていく であります。官民を問わず、 ことに取り組んでいきたいと思います。

第2は「大学側との連携強化」です。恒例の「社会工学セミナー」、 「同窓会役員と先生方との意見交換会」などに加え、定着した行事に なってきました就職活動への支援である「卒業生と学生との意見交換 図ってまいります。また、卒業生に関する情報の共有化などに関して も、大学と連携を強化していきたいと考えています。

が遠いなど、なかなか同窓会活動に参加できない方も多いと思います。 報を得られる可能性があることではないでしょうか。同窓会からのお知います。是非、同窓会活動にご理解ご協力をお願いいたします。

努めて参りたいと思います。

さて、話は変わりますが、「土 のが『准南子 (えなんじ)』とい



我々土木を志した者の主な仕事には公共・公益に資する社会資本の整備 であり、以って豊かな日本国民の生活や円滑な産業活動を築いていくこ とにあることは違いないと思います。母校の学科名が「都市環境デザイ ン工学」に変わって10年もの時が過ぎました。「名は体を現す」とも言 会」などをより一層充実したものにすることにより、大学側との連携を いますが、まさに日本の社会状況を表していると言っても過言ではない でしょう。政権交代、コンクリートから人へ、道路特定財源の一般財源 化などについて、ここでその議論は控えますが、東日本大震災や各地に 第3は「同窓会の役割の再構築」です。同窓会活動は任意活動であ おける災害等を経験して、「土木=3K」という、「土木」という言葉に対 り、一人ひとりに捉え方に差があります。また、仕事が忙しい、勤務地 する国民の捉え方が、ここに来て少しずつ復権してきているのも確かだ と感じています。道路、ダム、河川や空港、港湾など社会資本の整備は 同窓会活動の原点、魅力は、年代を超えた同窓生間の情報が共有される 安全で安心、豊かな国民生活を築く基本的な事業であり、今後とも我々 ことにより、個々人の仕事や社会活動などにおいて、有意義な様々な情 法政の卒業生が連携を一層密にし、共にその一翼を担っていきたいと思

### 都市環境デザイン工学科近況

## 都市環境デザイン工学科 学科主任 教授

卒業生の皆様には日頃より本学科の教育プログラム推進にご協力いた めの継続審査を受審します。JABEE認定により国 だき感謝申し上げます。特に学生の進路指導に関して、法土会の多大な「際的同等性をもった技術者教育の提供と、学科の ご協力のもと、3年生向け必修科目「ゼミナール」の一環として「卒業 特徴を活かした独自性の強化をバランスよくやっ 生と学生との意見交換会」を開催いたしました(2014年10月、通算3回 目)。卒業生による講演や業種別説明会など、3年生が本学科特有の就 職先の多彩さを実感し、社会のあちこちに先輩がいるという安心感を獲 得すると共に、法土会という同窓会の存在を強く意識する機会になった のではと思います。

【学科の体制】 2014年4月に道奥康治教授(陸水域環境研究室)が神 戸大学より着任し、2012年6月の岡泰道教授の逝去から約2年ぶりに専 任教員10名体制となりました。また、長く学科事務を担当した堀美津子 さんが2014年3月で定年退職し、後任として藤田朋子さんが着任しまし た。さらに、森猛教授が2015-6年度のデザイン工学部長に選出されまし た。本学科からのデザイン工学部長は草深守人先生(2008年度)以来2 人目となります。

本技術者教育認定機構)の認定を受けており、2015年度に認定更新のた ております。引き続き、卒業生の皆様のご支援をお願い申し上げます。

ていきたいところです。

#### 【都市環境デザイン工学科教育プログラムの方向性】

2015年1月に教育評議員会を開催し、本学科の 教育方法等について有識者の皆様に貴重なご意見



をいただきました。評議員5名のうち卒業生代表として鈴木和夫様(ラ イト工業株式会社代表取締役社長)、加藤昌宏様(多摩都市モノレール 株式会社常勤監査役)にご参加いただきました。将来技術者となる若者 が学生時代に学んでおくべき知識や教養に関することなど、大きな方針 から具体的な事項まで多くのご意見をいただきました。社会におけるシ ビルエンジニアの守備範囲は拡大し、技術者教育に求められる事項も従 来に比べて多岐にわたるようになりました。現代社会に対応できる基礎 的素養と、技術者の武器である工学的知識を身につけた若者を社会に送 【JABEE認定の継続】 本学科の教育プログラムは2004年よりJABEE(日 り出すべく、学科全体で教育の改善と工夫に取り組んでいきたいと考え

法政大学 理系同窓会ホームページ

http://133.25.196.100/joomla3201/index.php

法政大学 理系同窓会 都市環境デザイン工学科 同窓会ホームページ

http://133.25.196.100/joomla3201/都市.html

### 研究室紹介

## 地震防災研究室

### 都市環境デザイン工学科 教授 洒井 久和

### 【はじめに】

2013年4月から草深先生の後任として、地盤環境系の講義を担当しております。出身は大阪の府立天王寺高校で、一浪ののち、京都大学工学部土木工学科に進学しました。大学時代は高校時代と同様にラグビー中心の学生生活を送り、学部卒で若築建設に入社、設計部、技術研究所で16年勤めました。その後、独立行政法人の防災科学技術研究所で4年、立命館大学COE推進機構で1年、広島工業大学で6年の研究、教育に携わり、法政大学で教鞭をとっています。

#### 【専門分野】

専門は地盤地震工学です。この分野は土木学会での第1分野(構造系)、第3分野(地盤系)に分かれており、それぞれに重点を置く研究者がいます。私の場合は、土の動的挙動よりも地盤を含む構造物の地震時挙動やその影響、被害の軽減を近年の研究対象としており、第1分野を居所としています。法政大学での2年間の卒業研究、修士研究のテーマは、強震動推定、盛土や斜面の地震被害評価、道路や埋設管路などのライフラインの被害軽減方法に関するものが中心となっています。

まず、強震動推定では、地震観測記録が得られていない地点の地震時にどのような地震動が作用したか、将来、どのような地震が作用するかを、震源断層モデルを用いて評価し、この結果を地震被害シミュレーションの作用地震動として使用します。つぎに、盛土や斜面の地震被害評価についてですが、盛土や斜面などの土で構成されるものは地震による被害をある程度許容されています。これは復旧が容易であることが一因ですが、どこまで崩壊土砂が流動するのかが、早期復旧の可否に影響します。そのため、研究では盛土や斜面の地震時安定性だけでなく、崩壊現象まで評価しています。最後にライフラインの被害軽減方法については、ライフラインのような線状構造物では検討対象となる構造物の数が膨大になるため、詳細検討すべき構造物を特定するための一次スクリーニング手法の開発を行っています。また、確率論を導入して合理的な被害軽減手法の提案を目指してもいます。

#### 【おわりに】

法政大学のここ2年私が接している学生から感じられることは、見方が浅いかもしれませんが、学生たちが高い能力を持っていながらこんなもんで良いかと、現状で己を満足させている子が多いように思われます。自分自身が大学でろくに勉強をせず、大学院にも行かなかったことを社会人なってから後悔しましたので、頭の回転が非常に

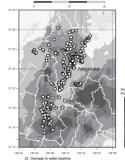


速い学生や、自分で問題点と解決策を見つけて卒業研究を進める学生に接すると非常にもったいなく感じられます。なかなか学生は賛同してくれないのですが、彼らにはまずは大学院に行って専門分野だけでなくエリートとしての様々な素養を培って社会人になってほしいと思っています。そして、彼らの意識改革を数年かけ地道にすすめながら、学生の素養を旧帝大や早慶と同等のレベルまで上げていきたいと考えています。そのためにも、是非、

引き続き法土会の皆様のご支援を賜りたいと存じます。よろしくお願い致します。



地震による地すべりの現地調査 (初日で余裕の学生たち)



338\*42 338\*48 338\*48 338\*31 338\*34 338\*37 338\*09

O Damage to water pipeline

Mainshock epicenter

研究事例:地震時におけるライフラインの簡易耐震性評価 手法の開発

#### 新着任教員のご紹介

## 水工学の動向と私の抱負 都市環境デザイン工学科 教授 道 奥 康治

2014年4月に都市環境デザイン工学科に着任した道奥康治(みちおくこうじ)と申します。生まれ、育ち、学校の全てにわたり大阪で、34年間大阪に在住・奉職しました。その後25年間の神戸時代を経て、東京にやっとたどりつきました。これまで東京との私的関わりはありませんでしたが、ご縁により本学のご厄介になり今日に至っております。

専門は河川工学、環境水理学ですが、最も長らくは貯水池の水質水理学を専攻してきました。本学科がまだ小金井キャンパスにあった2007年に水工学講演会が本学で開催され、岡泰道先生に大変お世話になったのが、本学との最初の関わりです。学会終了後、西谷先生に大変立派な水工実験室を見せて頂き、深く感銘を覚えたことを想い出します。

水工学に限らず工学分野では自然現象を正しく理解して学理を導き、プロトタイプの課題を解決することがオーソドックスな研究手順であり、何よりも実験や観測が最も重視されます。その意味で小金井に整備された水工実験室は現象重視の教育研究を具現できる施設と拝察しました。しかしながら、今日の水工学では、媒質・システムが非常に複雑な土砂水理・界面現象などを例外として、水理模型を用いた物理ション・ションが非常に少なくなりました、その背景には、乱流理論、数値解析、情報科学、観測技術の著しい進歩があります。これらの成果は、例えば、気象観測データを気象解析に同化しながら日々の天気を予測する数値天気予報に実装されており、10年ほど前の天気予報と比べても研究が飛躍的に進歩していることを日常生活の中で実感することができます。私自身の学位論文を振り返っても、当時、水理実験でしか再現できなかった密度成層の乱流・混合現象は、今日、地球温暖化予測や海象・気象予測に多く使われているMellow-Yamadaの乱流完結モデルなどで数値解析的に再現されます。大変ありがたいことに、私はYamada博士を



熱塩循環の研究をした菅生ダム貯水池 (兵庫)



中層貧酸素化の研究をした千苅ダム 貯水池(兵庫)

個人的によく存じ上げていたため最先端の乱流研究をリアルタイムで教えて頂く機会がしばしばあり、学位取得まもない頃に自分の実験結果を数値解析的に再現できた感動を今も鮮明に覚えています。加えて、河川管理者が現地観測データなどの情報を広く公開するとともに大学との連携・協力を惜しまないようになったため、現地データを利用した観測研究が大学でも可能になりました。このような水工学の



進展と周辺環境の変化を経て、現在では水理模型実験の目的がもっぱら数値解析の検証やパラメータ同定にとどまり、全国の大学・研究所の水工実験設備は、かつてほどの稼働率では利用されなくなりました。都市環境デザイン工学科のキャンパス移転を機とする水工実験室の廃止は、このような水工学の動向と同期しているとも言えそうです。今日の水工学は、水工実験室の代わりに地域・地球環境の劣化が進む流域圏がフィールドとなり、災害・環境など類型を問わず実スケールを対象とする現地観測や数値解析が大半を占めるようになりました。また、かつてのように治水が環境整備と対立概念であるという考えはなくなり、水系の災害と自然環境は一体システムとして取り扱われています。広義には災害は環境問題に包含されるという見解さえあり、今日の水工学には環境問題を主題とする実証研究が多くを占めるようになりました。

一方、現在の状況をやや批判的に眺めてみると、計測・実験施設の整備や研究資金の獲得に汲々とするあまり、研究資源依存型の研究に走りがちな分野が一部に見られます。研究には潤沢な財源が不可欠ですし施設の充実は大学の重要な管理戦略ですが、研究成果がお金の関数となっていたとすれば、資金力のある大きな大学だけが勝ち組となってしまいます。また、日本では実用化につながる即戦力研究ばかりが奨励されがちですが、日本が基礎研究に投資せずに「ただ乗り」することには欧米からの強い批判が集まっています。私の勝手な極論ではありますが、研究資源に依存しすぎずもっぱら基礎学理を追求する「紙と鉛筆」だけの研究スタイルには美学があり、そのような研究を一回でも実現することが私の現在のささやかな抱負です。当学科の水工実験施設は廃止され、私が使っていた現地観測機器も全て前任地に置いてきました。今や「紙と鉛筆」は私にとって有力な研究資源であり、新な職場環境の中で教員業務の新パラダイムを開拓したいと思っています。

### 寄稿文 東日本大震災から復旧・復興にむけて ふくしまより

福島県小名浜港湾建設事務所 阿部 守 一 (1994年卒)

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とする観測史上最大規模 M9.0の東北地方太平洋沖地震が発生しました。震災直後、地震に伴って 発生した津波、およびその後の余震により引き起こされた地震災害と福島第一原子力発電所事故。『東日本大震災』と呼ばれるこの震災は、福島県の状況を一変させることとなりました。

初めに福島県の紹介をさせて頂きます。福島県は東北地方の南端に位置し、北海道、岩手県に次ぐ第3位の面積を有し、周囲は宮城県を初め、栃木県、新潟県など計6県と接しております。県内は太平洋と阿武隈高地に挟まれた「浜通り」、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた「中通り」、奥羽山脈と越後山脈に挟まれた「会津」の3地域に大きく分けられます。中通りの「福島市」、「郡山市」、浜通りの「いわき市」、会津の「会津若松市」などが県内の主要な都市として挙げられます。全国的にも有名なものと言えば、磐梯山、猪苗代湖、鶴ヶ城、白虎隊、喜多方ラーメンなど会津地方のものが多く挙げられるかと思いますが、最近ではいわき市にあるスパリゾートハワイアンズのフラガールも復興のシンボルとして紹介されることが多くなりました。

震災時の話に戻しますと、福島県では、地震・津波による被害が県内全域に及びました。特に地震・津波による被害の大きかった浜通りでは、福島第一原子力発電所事故の拡大に伴い、立入りが制限された区域では数ヶ月間、被害の状況が確認出来ませんでした。立ち入り制限がない区域においても、原子力発電所が水素爆発した前後から、食料・ガソリンなど資材の物流はストップし、街から人の往来が無くなり、応急的な復旧にも手が付けられない期間が10日から1ヶ月間ほどありました。その間、関東地方で実施された計画停電はありませんでしたが、コンビニ・スーパーは閉店もしくは日時間限定、自宅は断水し、トイレ・お風呂は使えませんでした。また、職場では炊き出しを行い、おにぎりを食べて過ごしていました。一方、比較的被害の少なかった会津地方では7月の新潟・福島豪雨で、中通り地方では10月の台風15号でそれぞれ被災し、平成23年は県内全域が大きな被害を受けた年となりました。

県内に甚大な被害をもたらした東日本大震災から、4年余りが経過しようとしています。被災地域では今もなお被害の爪痕が見られる場所が

あり、また、多くの被災者が現在も避難生活を余儀なくされている状況にあります。しかしながら、公共施設の復旧、災害公営住宅の建設、住宅の高台移転等、復旧・復興は着実に進みつつあります。今年5月には、いわき市で第7回太平洋・島サミット(PALM7)も開催される予定です。機会があれば是非、復旧・復興が進む福島県の姿を見に来て頂きたいと思います。

なお、福島県内では現在、全国の自治体から職員派遣の支援を頂いております。私が所属する福島県小名浜港湾建設事務所でも、神奈川、香川、広島及び沖縄の4県から計10人の応援職員が在籍しており、福島県職員を含め総勢29名で『ふくしまから はじめよう。』をスローガンに、港湾・漁港施設の復旧復興を進めております。今回、復興支援で広がった他県職員の方々との『絆』は、震災復旧の成果の一つだと思います。『ふくしまから はじめよう。』は、ふくしまから新たな流れを創っていきたい。そうした未来への意志を込めたスローガンです。詳しくは下記のアドレスをご覧下さい。

https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01010d/fukushima-kara-hajimeyo.html#1

最後になりますが、震災以降、前述した派遣職員の方々をはじめ、全 国の方々から数多くのご支援を頂いたことに、この場をお借りして御礼 申し上げます。



Future From Fukushima.



職場の漁港復旧担当メンバー(神奈川県、 広島県、沖縄県)と共に(筆者は中段左か ら3人目)

### 寄稿文 ケニアでの生活と仕事

### 株式会社日本港湾コンサルタント 西野 腎 一 (1994年卒)

私は1994年に土木工学科を卒業し、建設コンサルタント会社に入社しました。大学では山田ゼミに所属し、4年生の時には週に $1\sim2$ 回ゼミに顔を出し、河川の観測等をしておりました。あまり学校に来ないので、先生に怒られながらも何とか卒業させて頂いたように記憶しております。現在の会社に入社した後、主に国内の港の調査、計画、設計業務等に携わってきましたが、2009年に海外の担当部署に配属となり現在に至ります。

海外では今までベトナム、インドネシア、東ティモールの業務に携わってきましたが、現在はケニアのモンバサ港でコンサルタントの施工監理をしており、ケニアには約2年間滞在しております。コンサルタントの施工監理の主な仕事は、発注者に代わってコントラクター(建設会社等)が仕様書通りに工事を行っているかをチェックすることや、図面、仕様書の発給、施工計画、材料等の承認、工事変更の指示といった発注者の代理人としての役割と出来高、クレームに対する査定を中立的な立場で行うことなどがあります。国内ではあまりなじみがありませんが、海外では一般的に用いられている方式です。

モンバサ港は、ケニア唯一の国際港で原材料や工業製品の大半を輸入に依存するケニアにとっては、重要なインフラ施設といえます。ケニアのみならず、近隣のウガンダ、ルワンダ、南スーダン、コンゴなどの国も同港を通して物資の輸出入を行っております。2012年より日本の政府開発援助(ODA)でモンバサ港の拡張工事を行っており、1期工事の完成は2016年の初旬を予定しております。これにより、取扱貨物量が現在の約1.6倍になると計画されており、ケニアの物流、経済の発展に寄与することが期待されています。1期工事の工期は、残り約1年となりましたが、進捗は今のところほぼ当初の計画通りで、桟橋、ヤード、建屋などの建設も着々と進んでおります。

私が現在おりますモンバサは南緯4度に位置し、熱帯気候に属します。雨期と乾期はありますが、一年中、半袖で過ごせる気候で、日本のような季節感は感じられません。ビーチや珊瑚礁などの海洋資源に恵まれ、欧米人が訪れるリゾート地でもありますが、近年は隣国ソマリアのアル・シャバブなどによるテロにより治安が急激に悪化し、観光客も減少しているようです。テロ以外にも、身近なところで強盗や空き巣などの犯罪が多発しており、常日頃から安全に対する注意の必要を感じてい

ます。現在、我々日本人が住む住居は周りを高い 塀に囲まれ、ガードマンも24時間常駐しています が、空き巣の被害にあっております。30年位昔の モンバサは、平和で安全な街で家の鍵などをしな くても問題はなかったようですが、近年は外部か らの人間の流入の影響により、残念ながら治安は 非常に悪い状態です。また、物価は輸入品が多い せいか割と高いです。自動車も近年増えてきまし



たが、道路が左側通行で同じせいか日本車(中古車)が多く、全体の90%は占めていると思われます。ちなみに車の価格は、輸送費と税金がかかるため、日本国内で購入する場合の約2倍となっております。

海外の仕事は、異なる習慣、文化、環境、言語を持つ国で行うため、国内での仕事とは勝手が違い、その分大変なこともあります。例えば、現地の発注者が時間にルーズなため、重要な打合せや会議にも毎回遅れて来ることや、ドタキャンされることもありました。そのため、懸案となっている問題がなかなか解決せず、工期等にも影響を及ぼすことがあります。また、設計や工事の最中に予期せぬ理由で大幅な変更が発生し、その対応に時間と労力を要したことなどもあります。良い点としては、1つのプロジェクトに調査、計画、設計、施工監理と長いスパンで携われる機会があり、その中で技術者としての幅を広げるチャンスがあることだと思います。近年、国内では大規模なプロジェクトが少なくなっており、このような経験ができることは新鮮でやりがいもありました。

最後になりますが、海外の仕事を行うに当たって身につける必要があると自分なりに考えていることを書かせて頂きます。なお、これらは現状十分に満足しているのではなく、今後の目標、課題でもあります。

- 1) 何か一つでも海外の業務に役立つ専門技術を持つこと。
- 2) 現地の発注者や関係者と対等に議論できるだけの語学力を持つこと。
- 3) 海外のインフラ整備の仕事では、時には電気や水道もないところに滞在すること もあるので、そのような環境にも耐えられる忍耐力と適応力?を持つこと。
- 4) 長丁場となることもあるので、ゴルフ、釣り、トレッキング等のできるだけ健全な? 趣味を持ち楽しむこと。(これにより、心身の健康を保つと共に、同僚や現地の人達と親睦を深めることが期待出来る)

### キャリアデザイン研究

### 『卒業生と学生との意見交換会』の報告

『卒業生と学生との意見交換会』が本格的になって3年目。今年度も 昨年度同様、授業の一環として就活を控えた大学3年生と大学院1年 生を対象として、学校と同窓会の共催で平成26年10月4日の土曜日 に開催しました。

今回は、前年度の事後アンケート及び学生への事前アンケートの結果を基に、学生にとって就職活動の羅針盤になってもらうため、第1部「パネルディスカッション」、第2部「業種別自由意見交換会」及び第3部「個別意見交換会」の三部構成で実施しました。

当日は、母校の学生のために 50 名近くの卒業生が参加しました。まず、大学のキャリアセンターから昨年度の就職実績とこれから始まる就職活動の心構え等を伝え、その後、社会の第一線で活躍されている卒業生 5 名によるパネルディスカッションを行ないました。パネルディスカッションでは、始めに学生からの事前アンケートで把握した質問内容に対して回答し、その後パネリストの就職活動への心構えや体験談などを話して頂き、生の声に多くの学生は聞きいっていました。

第2部では、業種別を4つのブースに分けて、それぞれの卒業生が、 学生の抱いている就活不安・疑問や事前準備方法などに対して、分か り易く真摯に回答しており学生にとっては、良いアドバイスになって いたと思います。

第3部では、第1部、第2部で聞けなかった卒業生の更なる本音トークを引き出そうと学生は活発に意見交換をしていました。

今回の意見交換会は、当初4時間を予定しておりましたが、第3部では学生の白熱した質問が多く、予定時刻を過ぎても収まる気配がなかったため、最終的には強制的に終わらせてしまい、まだまだ質問をしたかった学生の皆さんには大変申し訳ないことをしてしまったと思っております。

最後に、今回の意見交換会を踏まえ、新たに見えてきた改善点や反 省点を次年度へとつなげ、最終的には、『学生(学校)と社会(卒業生)』 の橋渡しになるような会にしていきたいと考えております。

法土会理事 山田 誉 (1991年卒)



第1部の状況



集合写真



第3部の状況

### 関西地区同窓会「法土会と恩師の会」の報告

関西地区同窓会では、平成26年度土木学会全国大会(大阪)に合わせて「法土会と恩師の会」を平成26年9月11日大阪弥生会館において開催しました。

平成之6年度 法政大学関西地区 ま 名前茂第字サイン開ອ会)と認識の会」 関西在住の卒業生、教室の先生、学生の他、学会出張の卒業生に多数参加していただき、総勢 51 名で盛大に行われました。

冒頭、須藤関西法土会会長の挨拶では、卒業生同士のネットワークの重要性とその構築に向けた取り組みについて貴重なご意見をいただきました。また、福井教授より学科の現状報告、ここ数年で大きく若返った先生方の紹介がありました。同窓会本部からは、役員の改選と同窓会の活動を報告しました。

懇親会では卒業生の近況報告、研究室紹介等があり、石井靖人さん (1991年卒)のリードで校歌斉唱、写真撮影をして閉会しました。

最後に、関西地区同窓会の開催にあたり、卒業生への案内は、教室の協力をいただきました。また司会を担当していただきました菊地博之さん(1983年卒)他多数の皆様と教室に同窓会として厚く御礼申し上げます。

法土会副会長 伊東 賢 (1981年卒)

## 第21回 社会工学セミナーの開催報告

第21回社会工学セミナーが下記のとおり開催されました。卒業生の皆様の学生時代の友との再会の場、社会での情報交換の場として、お二人にご講演いただき、その後懇親会もおこなわれました。今回は、都市環境デザイン工学科新任の道奥康治教授(陸水域環境研究室)と本学卒業生の鈴木和夫様(ライト工業株式会社代表取締役社長)にご講演いただきました。

日時: 平成26年7月16日 18時30分開始

講演:①技術界をとりまく社会情勢と教育・人材育成の課題:道奥康治教授

②土木屋の転機 ―ポジティブに機会をとらえる―:鈴木和夫様

多数の卒業生と教室の先生方にご参加いただき、卒業生からも活発に質疑がおこなわれて、有意義なセミナーとなりました。懇親会では時を忘れて賑やかに意見が交わされ、卒業生同士や先生方との交流を図ることができました。この社会工学セミナーが一層活用され、卒業生が学校に足を運ぶ機会が増えますことを願って今年も引き続き開催する予定ですので、多数の皆様のご参加をお待ちしています。

法土会副会長 中村 徹 (1978年卒)

# 編集後記

当号では卒業生からの寄稿文として、東北被 災地と海外(ケニア)でご活躍している同期 (1994年卒)のお二人に執筆していただきまし た。どうもありがとうございました。

昨年末、市ヶ谷田町校舎に立ち寄った折、学生時代より長きにわたりお世話になりました前任者の堀さんに代わり、2014年4月より学科の顔でもある事務を担当されている藤田朋子さん(かの女優さんと同姓同名)とお会いすることができました。卒業生の皆さんも、市ヶ谷近くに来られた際には、是非学校へお立ち寄りいただきたいと思います。

法土会編集委員 三村 卓(1994年卒)